

1998年度

駿台史学会大会

研究発表要旨

1998年12月12日

駿台史学会

於 明治大学リバティタワー1063教室

研 究 発 表

プ ロ グ ラ ム

自 由 論 題	(9 : 30 ~ 12 : 00)	リバティタワー	1063教室
1998年度テーマ『壁画の東西』			
研 究 発 表	(13 : 00 ~ 16 : 30)	リバティタワー	1063教室
特 別 講 演	(16 : 40 ~ 17 : 30)	リバティタワー	1063教室
総 会	(17 : 30 ~ 18 : 30)	リバティタワー	1063教室
懇 親 会	(18 : 30 ~ 20 : 30)	大学院第1会議室	

パ ネ ル 展 示	虎塚古墳壁画	リバティタワー	1063教室前
-----------	--------	---------	---------

自 由 論 題

9世紀末から10世紀初における新羅の政治・社会変動と高麗の成立	……………布山 和男	2
ヴァイマル末期からナチス政権へと至る時期の「ユダヤ人」のアイデンティティ	……………大川 勝康	4
古墳出現期における集落の動向	……………北島 大輔	6
近代における近江商人の酒造経営 — 北関東の清酒製造業を事例に —	……………青木 隆浩	8
中世後期における治水・用水と祈祷・祭祀	……………葛生 雄二	10

1998年度テーマ

『 壁 画 の 東 西 』

駿台史学会大会『壁画の東西』の企画に寄せて	……………駿台史学会企画委員会 (氣賀澤 保規)	12
サントリーニ島の壁画 — エーゲ海のポンペイ —	……………馬場 恵二	13
中国墓葬壁画よりみた玄武の成立	……………松崎 つね子	14
日本古代における道教・北極星・天皇	……………吉村 武彦	15
虎塚壁画古墳のコスモロジー	……………小林 三郎	16

特 別 講 演

高句麗古墳壁画とキトラ古墳	……………大塚 初重	19
---------------	------------	----

9世紀末から10世紀初における 新羅の政治・社会変動と高麗の成立

布 山 和 男

(明治大学大学院博士後期課程・研究助手・東洋史)

9世紀から10世紀にかけて、それまで250年以上にわたって朝鮮半島を支配してきた新羅が滅亡し、王建により新たに高麗王朝が創建された。

朝鮮の歴史は、周辺の諸勢力との相互連関の中で展開されてきたものであり、また外圧と抵抗の繰り返しによって朝鮮社会は発展してきたといわれている。9世紀から10世紀という時期は、朝鮮半島の情勢に対する周辺諸勢力の圧力が、比較的小さかったといえるであろう。しかしそれは、周辺諸勢力との対外関係が希薄になったことを意味するものではなく、その有様は、むしろより多様に、より複雑になっていったのである。

この時期は朝鮮半島のみでなく、広く東アジア全域において変貌の波が押し寄せていた。中国では、8世紀中頃に起こった安史の乱により唐王朝の権力に動揺がみられるようになった。そして9世紀後半の黄巢の乱の結果、支配体制の基盤が崩壊し、乱の渦中から登場してきた朱全忠が907年にその幕を閉じる役目を果たすことになる。その後も政治的不安定は継続し、五代十国時代を経て、960年に宋王朝が成立する。北方に視線を転じてみると、916年に耶律阿保機により契丹が成立し、926年にはその契丹により渤海が滅ぼされている。また日本においても律令制の弛緩が進行し、10世紀中頃の承平・天慶の乱に代表されるように武家社会への胎動が始まっていた。このように9世紀末から10世紀初にかけての時期は、まさに東アジア諸国がその面貌を一新する時期であった。そして高麗王朝はこのような東アジアの情勢のうえに、朝鮮半島の再「統一」を成し遂げたのである。

9世紀から10世紀にかけての時期は、朝鮮史においてひとつの大きな画期とされ、従来も朝鮮史における時代区分の問題をはじめとして、新羅の身分制である骨品制、地方豪族の動向、対外関係の様相などのさまざまな観点から問題とされてきている。しかしこれらの研究は、史料の制約もあり、新羅と高麗を断代史的に理解しており、新羅から高麗への歴史の変遷過程を連続したものとして把握しているとは言い難いものであった。

そこで今回の報告では、9世紀から10世紀における新羅の滅亡と高麗王朝の成立の過程を、連続的に理解するために、「人の移動」に視点をおき、それと関連する社会と国家の変動につ

いて論じてみることにする。

この時期には、8世紀以前にはみることができない人物群が登場してくることが注目される。すなわち流民や海上商人、僧侶などの知識人がそれである。従来、彼らの様相は9～10世紀における新羅から高麗への王朝交替と、あまり関連づけられてはこなかった。本報告ではそのような人物群の存在様態について、史料上で可能な限り追求し、高麗王朝成立の過程における彼らの位相について考えてみたい。

流民は、新羅の政治的な腐敗や自然災害などを原因として発生したが、それにより、それ以前の新羅の社会構造を支えていた秩序は動揺し、新しい秩序の再構成が必要とされた。

海上商人については、8世紀後半に活躍した張保臯が注目される。彼に代表される新羅商人は、東シナ海を舞台として海上貿易のネットワークを形成した。彼らの中からは、境界的な人間類型である《マージナル・マン》のような人物も登場してくる。

また僧侶は、この時期に登場した最も特徴的な人物群であった。彼らは教団において独自の僧政機構を保持し、各地を移動していく中で国家とは別のネットワークを作り上げ、自らの経済力と軍事力を背景にして、9世紀から10世紀の朝鮮社会においてひとつの勢力として現れてくるのである。

このように9世紀から10世紀という時期は、国家の抑圧に伴う緊張感が弛緩し、それ以前とは異なり商人や僧侶などが、それぞれに国家とは異なる「世界」を形成し、それが顕在化してくる時期であったのである。

高麗王朝は、そのようなさまざまな「世界」を持つ人物群を包摂して、国家を形成していったのである。

ヴァイマル末期からナチス政権へと至る 時期の「ユダヤ人」のアイデンティティ

大 川 勝 康

(明治大学大学院博士後期課程・西洋史)

「ユダヤ人」のことを「非一場所」的存在と形容することがある。ホロコーストへと至る歴史を見ると、この言葉の正しさが証明される。本報告で取り上げるのはそうした「非一場所」の中にありながらも、自らの「場所」を捜し求めようとしたユダヤ人たちの姿である。具体的には、本報告はヴァイマル期におけるドイツ・ユダヤ人に焦点を当て、以下の点を考察していく。

ドイツにおけるユダヤ人解放以降の世俗化の進展という流れの中であって、ユダヤ教やそれに基づくユダヤ文化というような要素によって全体として「ユダヤ人」がまとまっていく可能性は相対的に弱まってきたが、そうした流れの中で、外部からの圧力・事件を通じて、一部分のユダヤ人がまとまっていく局面を考察し、その際に、一方ではヴァイマル民主体制への期待と、他方では「ユダヤ性」との間で複雑な葛藤状況が見られたことを示していく。

ユダヤ人解放以前においては、「ユダヤ人」はもっぱら宗教的な存在として見られ、また彼ら自身も自らの自己理解や拠り所をユダヤ教の中に見出してきたと言えるが、解放以降、法的・市民的平等の権利を手に入れたことと、世俗化の進展によって、ドイツ・ユダヤ人は広範な政治的・非宗教的な空間へと踏み出すことになった。

確かに大部分の「ユダヤ人」はユダヤ教を信仰していたものの、それは世俗化したものであり、また、キリスト教へ改宗したり、ユダヤ教信徒共同体（ゲマインデ）から脱退してドイツの政治や経済などで活躍する「ユダヤ人」たちの存在や、ユダヤ人国民学校の衰退傾向など、ゲットーから解放された彼らは世俗化のもとで、完全な形とは言えないにせよ、ドイツの政治や社会へと参加し、主体的に自らの居場所と役割を求めようとしたのである。

こうした領域の中で、「ユダヤ人」は、それぞれの立場や、社会に対する自らの見方に即して、多様ないわばアイデンティティを形成していった。例えば、「ドイツ人」としての意識を

強く持ちつづけていた「同化主義ユダヤ人」や、ナチスに対してさえも支持を表明した「完全な同化主義者」、あるいはパレスチナを目指すシオニスト、シオニストの中でも穏健派と急進派など、彼らは政治的な、あるいは非宗教的な側面で彼ら自身のアイデンティティを形成していったと言えるだろう。

このように啓蒙期以降の解放の歴史は「ユダヤ人」を多様なアイデンティティへと拡散させたが、その一方で、ナショナリズムの高揚とその言説は「ユダヤ人」を一体的な存在として外部から規定していく傾向にあった。

そうした外部から押し付けられるユダヤ人像、あるいはそれに基づいてなされる実際の攻撃に対する反応の中で、「ユダヤ人」たちのアイデンティティは動揺を示し、そして現実主義的に「まとまって」いったと考えられる。この「まとまり」はドイツのあらゆる「ユダヤ人」たちを内包するものではなかったが、しかし、本報告の中で見ていくように、当時のかんりの部分の「ユダヤ人」の信条を代表していた「同化主義ユダヤ人」と、ヴァイマル期以降次第に勢力を強めてきたシオニストの間に、一定の融合（例えば、パレスチナ中心主義的傾向にあったシオニストたちは、ヴァイマル体制のドイツを防御していく方向で同化主義者側に歩み寄りを見せ、他方、同化主義者側も一部でパレスチナを好意的に見る者も現れてきた）が見られたことは、ナチ政権下における広範な「ユダヤ人」相互間の協力関係を生み出す重要な要素となっていく。

ユダヤ人解放は「ユダヤ人とは何か」「ユダヤ人とは誰か」という問いに対する答えをユダヤ人自身に決定させる主体的な可能性を彼らに与えたが、ナショナリズムの進展、とりわけナチのフェルキッシュな運動の展開はその可能性を著しく脅かした。本報告は、主体性と受動性の中で揺れ動く「ユダヤ人」のアイデンティティを彼ら自身の視点に立って考察しようとするものである。

古墳出現期における集落の動向

北 島 大 輔

(明治大学大学院博士後期課程・考古学)

古墳出現期の研究は、日本列島における本格的な階級社会の成立を考える上で重要である。しかし、実際の研究は墳墓とその出土遺物を中心に論じる傾向が強く、集落などの研究はいまだ低調といえる。一方、近年では「初期国家論」や「都市論」、「居館論」など、当時の生活遺跡を考察するための理論的枠組みが提示されつつある。これらのモデル自体は考古学・文献史からの着想がベースとなっているものの、現在、実際の地域研究に十分に反映されていない。今後はこれらのモデルと実際の考古学的な資料操作の間を埋める努力がなされるべきである。以上の点を念頭に置きながら、本発表では集落動向を分析の中心に据え、弥生から古墳社会への変革を考える。また、古墳時代の幕開けを告げる大型墳墓の出現や土器交流の顕在化の背景にも簡単に言及したい。

では、事例を挙げながら集落の類型化を試みていこう。近年の調査の蓄積は集落にも様々な形態が存在することを明らかとしている。一つめは、竪穴式建物が主体で、高床式建物や掘立柱建物は少なく、隔絶した大型建物は不在の集落類型。列島全域で一般的に認められ、比較的均質・水平的な集団構成が想定できる。静岡県中平遺跡を例にとって説明する。遺構の構成や配置をみると弥生集落の伝統を色濃く残すものの、環溝を持たない点からも弥生時代の拠点集落とは明確に区別できる。

このような弥生的拠点集落の終焉と連動して現れるのが、次の集落類型である。すなわち、大型の掘立柱建物を方形プランの柵列・土塁・溝が囲繞し、高床式倉庫とみられる掘立柱建物群を伴う。また、薄甕など特殊な技術を要する土器群が先の一般的集落より卓越する傾向がある。静岡県大平遺跡や大分県小迫辻原遺跡が代表例である。先の一般的集落から切り離された上位階層の「首長居館」としての性格が想定できる。ただし、この首長居館的集落が必ずしも大型の墳墓の造営に結びついていない点は注意を要する。

そして、三つめの集落類型は、交通の要衝に立地し、竪穴建物や掘立柱建物・土坑で構成され、居館的な大型建物は不在である。系譜が複数に求められる外来系土器群の出土が顕著な点特徴的である。鉄素材や鍛冶関連施設の存在も問題となろう。首長居館と同様、地域の中では必ずしも一般的ではない。市・津・港といった物流拠点集落としての性格が想定でき、古

代・中世を通じ物流拠点として存続する事例も多い。福岡県博多遺跡群、岡山県津寺遺跡、大阪府崇禅寺遺跡、奈良県纏向遺跡はこれに該当しよう。

以上の集落類型をもとに弥生時代から古墳時代への変遷過程をトレースすると、次のようになる。すなわち、弥生時代の集落論は、従来、拠点集落（母村）—一般疎塊村（子村）といった村落間関係として捉えられてきた。

それが古墳時代に入って環濠を伴う拠点集落は解体。古墳時代初頭から首長層は一般村落から隔絶した居館へ移り住むとみられる。また交換を行う場は、遠隔地から搬入される外来系土器からみて弥生時代の拠点集落の内部にすでに存在していたと推察されるが、古墳時代に入って物流拠点集落として独立・肥大化すると考えられる。

これまでの集落動向の分析から、弥生から古墳への転換期は、大型墳墓の出現によって特徴づけられるばかりでなく、集落構造も劇的に変化することがわかる。性格を異にする集落が有機的に結びつきあうことにより地域社会を形成したとみられるが、さらに列島各地に点在する物流拠点集落は互いにネットワークを形成していたであろう点も重要である。鉄素材に代表される自給できない必要物資の流通はこのような物流拠点を通じて行われたものと想定され、地域を横断する物的・人的な動きを活発にする。汎列島規模でみられる多地域の土器が多方向へと移動・伝播する現象や前方後円墳に代表される墳墓体系の成立を理解するうえで、示唆するところが大きい。このことは、居館的集落と物流拠点集落の両者がセットとなる場合に集落規模が拡大化し、地域を代表する大型古墳が形成されることから支持されよう。

近代における近江商人の酒造経営

— 北関東の清酒製造業を事例に —

青 木 隆 浩

(東京大学大学院博士課程・地理学)

近江商人に関する既存の研究は、膨大な数にのぼる。近江商人は、麻織物を扱った湖東商人、畳表と蚊帳の販売を行った八幡商人、綿織物業を中心として多角経営を行った高島商人、醸造業を営んだ日野商人に分けられる。この中で、特に注目されてきたのは、数多くの豪商を出した湖東商人、八幡商人であった。反対に、関東の中小都市に進出し、中規模経営を主とした日野商人については、江頭恒治(1965)を除くと研究蓄積が少ない。

しかし、日野商人の醸造業には、2つの注目する点がある。1つには、近江商人が一般に江戸時代を通じて巨利を得たことに対し、醸造業、中でも酒造業に従事した日野商人は、明治期以降に成功をおさめたことがあげられる。江戸期の酒造経営には制約が大きく、「幕藩体制確立期には、酒造業はあくまで城下町を中心に、宿場町・門前町・寺内町・港町などの都市(町方)に限られていて、農村(在方)において酒を造ることは勿論のこと、農民が酒を飲むことも禁止されていた」(柚木学, 1990)。これに対し、近代は「饅詰小売法が考案せられてから、急に僻村でも酒が手に入りやすくなり、従って酒を飲む癖を普及させたことは争われないが、これとても時を構わずに飲むという慣習が、すでに公認せられていた」時代であった(柳田国男, 1939)。つまり、日野商人にとって、清酒の飲酒量が増大した近代は、経営規模拡大のきっかけとなった。注目すべきもう1つの点は、関東の地主酒屋が近代になって次々と廃業していくのに対して、日野商人は安定経営を続け、むしろ規模拡大をしていったことである。

日野商人が、近代に経営規模を拡大した要因として、まず、組織力をあげることができる。人類学の成果によれば、日野の親族組織はイトウと呼ばれる年齢階梯性集団であり、無家格型に位置づけられる。ところが、実際には、商人の間に家の格が存在していた。古い家、経済的・文化的に成功した家の格は高く、分家別家は世代を越えて本家に仕える。奉公人にとっても、格の高い商家に従事することが誇りであった。ただし、奉公にでられる商家の範囲は、自宅から半径約2km程度に限られていたという。中心部は町村合併以前の日野町で、本流筋の屋号を日野屋、傍流筋の屋号を近江屋、舛屋としている。隣村の北比都佐村の一部の商人も、この日野屋の仲間に入っている。これらは主に関東の城下町や門前町、宿場町に出店した。北比

都佐村のその他の商人は、本流筋に十一屋、傍流筋に江州屋という屋号を用い、中山道沿いに出店した。また、隣村の朝日野村や水口村の商人も、日野商人とは認識されていないが、日野商人を頼って、主に栃木県に出店した。朝日野村や水口村の商人は、日野商人ほどに組織化されておらず、暖簾内の商家数も少ない。

日野商人は、このような村落内での組織を維持しつつ、出店先での協力関係も築いていった。埼玉県北埼玉郡には、日野町において中井源左衛門に次ぐ豪商といわれる鈴木忠右衛門とその別家である横田庄右衛門が出店している。彼らが明治期の営業自由化の際にまず行ったのは、北埼玉郡、さらには埼玉県の酒造家を仲間に引き入れ、濁酒の製造量を縮小し、清酒の市場を拡大することであった。つまり、1875年に酒類税則が改正されたことによって、濁酒が無税となり、清酒の酒税負担が大きくなると、酒税を担う代わりに濁酒の製造を禁止して欲しい旨を埼玉県に提出したのである。日野商人は江戸期にはすでに新川に支店を設けるなり、地廻酒問屋との取引をもつなりして広域的な販売網を築いていたが、明治期の東京市場が地廻酒にとって取引価格の面から不利になると、酒蔵周辺の市場を拡大することを目指した。そのためには日野商人以外のその他の酒造家の協力が必要であったのである。

しかし、日野商人は必ずしも横並びの経営を目指したのではない。酒造組合の各支部で要職に就き、主導権を保持することで、醸造試験所の技師を招くなど酒造改良上有利な位置を占めたのである。

文 献

上野 和男(1992)『日本民俗社会の基礎構造』ぎょうせい

江頭 恒治(1965)『近江商人中井家の研究』雄山閣

小倉栄一郎(1980)『近江商人の系譜—活躍の舞台と経営の実像』日本経済新聞社

柳田 国男(1939)「酒の飲みようの変遷」(所収『柳田国男全集17』筑摩書房, 1990)

柚木 学(1990)「飲酒と節酒論—その歴史的考察—」

経済学論究(関西学院大学)第44巻第2号

中世後期における治水・用水と祈禱・祭祀

葛 生 雄 二

(明治大学大学院博士後期課程・日本史)

1. 問題の所在：中世の勸農が呪術的性格をもつことはすでに指摘されている。しかしその具体像と歴史的展開過程は検討がまだまだ十分ではなく、経済的・政治的側面が検討の中心である。筆者もまた中世後期の用水をめぐる勸農について、経済的・政治的側面から検討してきた。しかし用水維持における勸農の役割は井料の徴収と分配・裁判などにとどまらず、祈禱・祭祀に及ぶものである。近年、治水・用水の祭祀について考古学の成果もみられ、文献史学側の一層の検討が要請されている。そこで本報告は、中世後期の勸農研究の一環として、表記の問題を検討するものである。

2. 荘園領主による治水と寺院の祈禱：観音寺は、皇室領美濃国大樽荘内の勝村郷に位置し、尾張国真福寺の末寺として、祈禱の実績により勝村郷の土地寄進をうけていた。延文5年(1360)の堤防大破ののち、観音寺は堤防完成のための祈禱をおこなう。この祈禱を契機として、観音寺は「本家・領家御祈禱」のため以前の寄進を確認し、あらたに寄進をうけている。このような大樽荘の公田公畠の寄進の際には、本家の寄進状・預所の施行状が作成されていたが、さらに公文・下司・百姓が請文・渡状を提出していたことは、かかる祈禱・寄進の遂行に関して、在地の承認が必要であったことを意味している。同時に、堤防完成のためには祈禱が必要と考えられており、このような祈禱・寄進に公共的意義が認められていたことが確認できる。

3. 在地による池築造と祈禱・祭祀：和泉国日根荘日根野村では、応永26年(1419)に築造した十二谷下池の利用について、永享3年(1431)に他村との間に協約を結んだが、その10年後、嘉吉元年(1441)に、龍王などの神々を勧請し、祭をおこない、協約を確認している。領主九条家による用水支配は、立荘以前から存在していた鎮守である大井関神社の進止権の獲得により可能となったことが既に指摘されているが、嘉吉元年の在地による龍王などの勧請・祭祀は、在地による用水池の管理・利用、すなわち在地勸農を構成するものであったといえる。紀伊国粉河寺領東村では、鎌倉後期・南北朝初期に在地により築造された溜池について、15世紀に池祭がおこなわれていたことが確認できる。なおこのような毎年の祭・祈禱については、「祈禱田」などの名目で免田が設定されることもあった。このような在地勸農の発展にともない、領主主導による勸農・祭祀は比重を相対的に低下させることとなった。一宮の事例である

が、紀伊国一宮日前宮の井祭の衰退の事例などは、この事態の傍証となろう。

4. 大名権力による治水と祈禱：信玄堤は戦国大名による治水事業として最も著名である。後世の史料であるが、『甲斐国志』に「荒川…武田氏ノ時、大ニ防河ノ役ヲ興シ…神明・御崎ノ両社ヲ置テ、堤防ノ堅牢ヲ祈ル」とあり、戦国大名にとっても、治水にともなう祈禱は不可欠であった。また、大名権力の範疇をこえるが、文禄2年(1593)、秀吉は陰陽師徴集令を全国に発している。結果、約130名もの陰陽師が尾張に集められ、木曾川の堤防決壊による荒地の復旧工事のため、信仰・経済上の要地に派遣された。これに関しては、浮遊民の社会的一掃と陰陽師による地鎮が、ともに期待されていたことが指摘されており、ここでは陰陽師にたいする期待と蔑視が混在している。

5. 高野山木食応其の活動：やや異色の事例であるが、木食応其(おうご)の活動をとりあげたい。客僧身分であるが、秀吉とのつながりにより高野山内で多大の影響力をふるい、紀の川流域にも安楽川井の再興を主導するなど、多大の足跡を残している。紀伊国隅田荘内の垂井にある岩倉池について、天正18年(1590年)、応其が隅田名乗中・同地下人中にあてた書状がのこっている。その中で龍王を勧請することと、池堤の上に石塔を建立することを勧めている。

6. おわりに：本報告の内容をまとめれば次のようになる。①中世前期に比して、勸農に関して領主のもつ比重が低下し、労働力動員・祭祀からなる勸農の主体が分散・拡大していること。②領主勸農の実施にあたっては、在地の承認が必要とされたこと。③祭祀は公共的意義をもつものとして勸農の不可欠の要素であり、在地や大名権力による勸農においてもそれは同様であったこと。④在地勸農の存在を前提として、在地に対して領主権力からの働きかけがなされたこと。今後の課題としては、祭祀と支配・公共性の問題、人柱伝承・吉書などのもつ意味、普請・開発一般の祭祀の状況、などがあげられよう。

なお、報告では、上記①～④のほか、⑤祭祀の社会的機能、⑥祭祀に対する意識についても言及したい。

駿台史学会大会『壁画の東西』の企画に寄せて

駿台史学会企画委員会
氣賀澤 保 規
(明治大学文学部教授・東洋史)

今年春、奈良明日香村のキトラ古墳にカメラが入り、側面の壁からは四神図が、そして天井からは天文図の壁画が発見され、世間をあっといわせたことは記憶に新しいところである。とりわけ三本の同心円ともう一本の黄道からなる星宿図の存在は、東アジア最古にして精妙な天文図として、多くの関心を集め様々な論議をよんだ。その天井に描く技法と技術者の由来、下図のもとになった場所の所在、図にこめられた時代性や墓主の出自、ひいては当時(7世紀～8世紀前半)の人々の天文観・自然観・宗教観などが何なのかと。こうした過程から、改めて古代墳墓や居住の場に描かれた壁画のもつ意味の大きさを考えさせられたことであった。

壁画とは歴史上の断面を、図像(映像)の形をとって後世に伝える生の貴重な史料である。それは、単なる時どきの一場面・一形象に終わるものではなく、当時の人々の生き方や思いをこめた、いわば時代そのものの凝縮といってよい。わたくしたちは壁画を介して、背後に広がる文字で表しきれなかった豊かな世界に迫り、大きくイメージを膨らませることを可能とする。見方をかえれば、それは後世にたいする視覚によるメッセージであった。

駿台史学会では、一昨年と今年の2年間、「植民地支配の国際比較」を総合テーマとするシンポジウムを実施し、植民地問題の多面性や歴史学の責務について認識を深めた。本年度はその企画が一応終了したことをうけて、歴史研究の原点たる史料の問題に立ち返り、一定のゆるやかな柱を立て、そこから東西文化の比較や歴史世界の本質を考えてみようということになった。こうした積み重ねが、新たな視座の獲得や問題の提起につながると期待するからでもある。

そこで第一弾として設定されたのが、壁画の問題を基軸にすえたこの「壁画の東西」となる。幸い各専攻の協力のもと多彩な顔ぶれがそろい、さらに特別講演の大塚初重先生にもその方向でご諒解いただいた。ここに、西は古代ギリシャから、古代中国、朝鮮(高句麗)をへて古代日本におよぶ、東西壁画の世界が一堂に会する企画が実現した。なお、虎塚壁画古墳はわが考古学専攻が二十五年前に発掘に関わり、今日も保存と公開を両立させる唯一の事例である。その貴重な成果を知っていただくためにパネル展示も用意した。また各発表では図や写真が多用される予定であり、それらから古代人の世界に思いを馳せていただければ幸いである。

サントリーニ島の壁画 — エーゲ海のポンペイ —

馬 場 恵 二
(明治大学文学部教授・西洋史)

画像のからだ西洋古代史上の画期的資料ないしは学問的波紋ということで今回のテーマを選んだ。別段、現在、自分がこの分野で独自の研究を現在進めているわけではない。

1939年、ギリシア本土ペロポネソス半島の一角においてピュロスの王宮が発見され、そこから大量の linear B 粘土板文書が出土した。クレタ島クノソス出土の linear B 文書が、その発見者で、「クノソス中心主義」Knossocentric の立場を固めていた学界の大御所 A. Evans の厳重な管理統制の下に置かれていたのとは異なって、ピュロス文書は直ちに情報開示されて学界の共有財産となり、第二次世界大戦中の解読作業の積み重ねが重要な下地となって、1952年、linear B はギリシア語を表記した文字として解読された。Evans の描いたエーゲ先史の像はまさしく「コペルニクス的転回」に直面させられたのである。

Evans は1900年開始のクノソス宮殿の発掘によってエーゲ先史の相対年代編年に留まらず、クレタ島出土のエジプト製品を手掛かりとした絶対年代の推定まで遂行した。「エーゲ先史学創始者」と呼ぶべき大物である。しかし、その「クノソス中心主義」から、ギリシア本土のミケネ文化を「植民地文化」とみなし、ピュロスの王宮における linear B 粘土板文書の大量出土こそは、ピュロス王宮そのものが、実は、クノソス勢力のギリシア本土支配の拠点であったことの証拠にほかならないとされた。しかし、linear B がギリシア語となれば、形勢は完全に逆転して、クノソス宮殿はその歴史の少なくとも最終段階においては、ギリシア語を公用語とする勢力の支配する拠点と化していたとしなければならない。支配のベクトルの180度転回である。

ここで問題になるギリシア人のクレタ進出の時期は前15世紀半ばが有力な候補であるが、1968年に始まったサントリーニ島アクロティリ遺跡の発掘は、遅くとも前16世紀の段階において、ギリシア本土とエーゲ海島嶼との間に相互交流の存在したことを証明するかなり明白な状況証拠を提示してくれることになった。

今回の報告は以上のような観点から、現地取材のスライドや壁画資料を使用しながら、ミケネ台頭期に重なる形での、本土ギリシア人勢力のエーゲ海進出という問題を扱うことにする。アクロティリ遺跡そのものについては「西の家」Dytike Oikiaと「切石構築3号」Xeste 3 それぞれの構造と壁画が観察の対象となる。

中国墓葬壁画よりみた玄武の成立

松崎 つね子

(明治大学文学部教授・東洋史)

壁画が描かれるためには、墓内に空間をもつ構造がとられなければならない。中国の殷以来の伝統的墓葬構造は竪穴木槨墓であった。この構造は、地上から墓室に通じる墓道は槨の天井部に至る。したがって棺・副葬品は、槨の天井から降ろし、天井板でふたをして閉じる。この形式を主流とする時代は、基本的には壁画は発生しない。天文図も、見あげる空間がない限りあり得ない。

この構造に横穴形式が取り入れられるのは戦国中期、秦の領域での民衆墓からで、横穴形式の本格的な大墓が造営されるのは、漢の劉氏一族の諸侯王墓からである。だが多分その先鞭は始皇帝陵墓であろう。記録によると墓内に「天文・地理を具えた」とある。天文図を描いたとする多分最初の記録であり、実際に描かれた墓としても嚆矢とするのではないか。だがどの程度のものが描かれたのか。これよりほぼ200年前の「曾公乙墓」出土の衣装箱のふたに二八宿の星座が描かれていた歴史を持ち、『史記・天官書』が星座についての十分な知識をもっていたことからみて、精緻なものであったと想像される。

ではなぜ天文図を墓に持ち込んだのか。永遠の生を望んだ始皇帝が、墓中にこの世の再現を志したからであろう。墓葬の垂直構造から水平構造への変化は、このことと密接に関係している。彼は墓中に宮殿を造り、山・川・湖・海をつくり、そこに水銀を還流させる装置を造ったという。この記録からは、後に壁画のモチーフとなる神話・伝説の類の入る余地はない。もし正確な天文図が描かれたとするなら、管見の限りではあるが、漢墓発掘例に精緻な天文図が見られないことからみて、それは継承されなかったとみたい。ではまったくなかったかといえはそうではなく、象徴化した形象で表現された日月星辰であった。現在のところそれを代表するのは馬王堆漢墓出土T字型帛画であろう。これはもちろん壁画ではなく、幡としての絵であるが、それ以前の墓内絵画と、以降の本格的墓葬壁画とを繋ぐ結節点として大きな意味をもっているように思う。この絵を出発点として論じたいと思っている。

日本古代における道教・北極星・天皇

吉村 武彦

(明治大学文学部教授・日本史)

奈良県の飛鳥池遺跡から、天武朝と想定される「天皇」銘の木簡が出土した。すでに7世紀前半の遺跡から星辰にかかわる呪符木簡が発見されている。直接的な文字史料には恵まれていないので憶測が多くなるが、古代の天皇号成立について、蕃国・夷狄支配からではなく、道教思想と星辰の視点から説いてみたいと思う。当日の報告の目次は、以下のような順序になる予定である。

はじめに

I 星辰と暦

(1) 考古学

- 大阪市法円坂の5世紀代の倉庫群、稻荷山古墳出土鉄剣銘、古墳と星座

(2) 『日本書紀』

- 神代(星神「香香背男」)、「星の神話」の問題
- 欽明紀、推古紀、天武・持統紀

(3) 同時代的史料

- 木簡、七夕

II 古代王権と星辰

(1) 国王と天

- 王と天、称号

(2) 陰陽寮

(3) 日本における道教思想

- 天人相関思想、道教思想における星辰信仰、道教思想の受容

III 天皇号の成立

(1) 「治天下の王」

- 「王」から「天皇」へ

(2) 「天皇」銘木簡の出現

虎塚壁画古墳のコスモロジー

小林 三郎

(明治大学文学部教授・考古学)

1. 虎塚古墳の概要 (別紙資料参照)

2. 虎塚古墳の壁画

虎塚古墳の壁画は、石室奥壁と両側壁に描かれている。また、玄門外側の周縁にも鋸歯文が施されている。天井と床には、いずれも赤色顔料(ベニガラ)による彩色が施されており、石室全体が赤・白の2色によって彩られている。他の色彩はみられない。

壁画の内容は次の通りである(参考図番号と照合)

- | | | | |
|---------|------------|-----------|------------|
| ① 円環文 | ⑥ 鞞 | ⑪ 馬具(面繫?) | ⑫ 不明(戟?) |
| ② 三角文 | ⑦ 槍・銚類 | ⑬ 鐙 | ⑭ 三ヶ月文(船?) |
| ③ 大刀 | ⑧ 双頭渦文・吊手文 | ⑯ 鞍敷(障泥) | ⑰ 円文(鏡?) |
| ④ 冑(鞞?) | ⑨ 鞞 | ⑱ さしば(?) | |
| ⑤ 甲(鞞?) | ⑩ 楯 | ⑲ 首飾(?) | |

以上のように、幾何学的図文と具象的な表現とが、相半ばしている。

石室内部の周囲・天井部との境界には連続三角文をめぐらせており、さらにその上部を天井と連続させるように赤色塗彩を施している。奥壁の上部だけは、連続三角文を二段に表現している。

3. 虎塚古墳壁画の系譜

(1) 装飾古墳の変遷

一般に装飾古墳の成立は、古墳時代の横穴式石室導入の時期との関連で考えられている。即ち、石棺に直弧文や円文を彫刻したものを出現期のもの(4世紀末～5世紀初)と考えており、横穴式石室導入以後、板石積石室にともなう石障に彫刻を施すものをもって、日本的装飾古墳の出現(5世紀初頭)と考えている。石棺に彫刻された直弧文や円文は、石障をもつ装飾古墳で最盛期を迎える。

石障系の装飾古墳は、肥後型石室と呼ばれる玄室平面プランが正方形に近い石室構造をもつものに特徴的にみられる。

次いで出現する装飾古墳は、壁画系と呼ばれており、石室の壁面全体に装飾を施すものである。

玄室の奥に石屋形と呼ぶ遺骸安置施設をもつものがあり、玄室、前室、玄門、羨門にまで、彩色による壁画を施すものも登場する。福岡県桂川町王塚古墳などが典型的な例である。この段階で、直弧文はほとんど姿を消し、円文も鏡を模したものから(石棺系のものに彫刻されている円文の中には、鏡の鈕を表現したものがある)、単純な円文に変化する傾向をみせる。

武器、武具、人物、動物、船、さしばなどの具象画もこの段階で登場する。まさしく装飾古墳の全盛時代といえよう。この現象は5世紀代後半から6世紀代前半まで継続し、6世紀代後半には終りを告げる。大規模古墳、大規模石室の造営が不可能になってきたことと関連すると考えられる。

(2) 虎塚古墳の年代

虎塚古墳の石室は、板石を組み合わせた横穴式石室である。石室は、構造からみて6世紀中葉～後葉の関東地方によくみられる型式のものと考えられる。

茨城県内の4基の装飾古墳のうち、関城町船玉古墳と岩瀬町花園3号墳が板石を用いた複室構造であるが、他は、いずれも板石を用いた単室の石室構造をもつ。船玉古墳の年代については、その石室構造からみて6世紀中葉以後の年代が与えられるが、副葬品などが明らかでないから、年代決定の決め手を欠いている。虎塚古墳を含めて他の3例は、いずれも6世紀代後葉の築造と考えられる。とくに、岩瀬町花園3号墳は、虎塚古墳とは異なる壁画表現があり、石室構造の全体的な検討からすると、虎塚古墳よりも若干先行する年代が与えられよう。霞ヶ浦町(旧出島村)の大師唐櫃古墳例は、年代決定資料を欠くが、羨道をもたない石室構造で、いわゆる石槨式石室のように見えるので、虎塚古墳よりは後出のものとして理解できる。7世紀初期に比定できようか。

従って、虎塚古墳の年代を6世紀後葉の中頃、つまり実年代で云えば575年頃の築造とみている。虎塚古墳の発掘調査によって得られた資料には、ことに、石室前庭部周堀縁辺にみられる集石遺構内の遺物には6世紀後葉に比定できるものがあり、石室内遺骸に添えられた遺物には7世紀代初期と考えられるものがふくまれているから、虎塚古墳の最終埋葬を7世紀代に求めざるをえないことになる。

(3) 虎塚古墳壁画の系譜

虎塚古墳壁画の内容は、先述のごとく幾何学的文様と武器、武具、馬具などの具象的文様で構成されている。

こうした文様構成を検討してみると、熊本県永安寺西、同東古墳に描かれた円文を中心

とする文様構成とあい似たものが指摘される。また鞞や楯などの武具類には、福岡県五郎山古墳、同日ノ岡古墳、佐賀県田代太田古墳などの壁画文様と共通する点を看取することができる。

文様の各々については、各古墳のもつそれぞれの特徴があるから、直接的な関係を求めるのは不可能であるが、総じて北部九州地方の、ことに肥前、筑後、肥後といった有明海東岸地域、菊池川、筑後川、球磨川流域に分布する装飾古墳群に近いものを想わせる。何故、そうした現象が見られるのかについては諸説がありまだ結論がない。

(4) 虎塚古墳壁画の意味するもの

壁画に描かれた題材から考えられる背景について考えてみよう。

武器・武具類から考えられることは、それまでの古墳の副葬品の感覚を想起させる。立てかけられた槍、鉾、大刀などは、まさしく被葬者を守護するという意識であろう。鞞、楯も弓矢の表現がないが、同列の意識と考えられる。

当時(6世紀後半～7世紀初)、もはや副葬品としては消滅しつつあった馬具類が形骸化して名残をとどめている。いずれも、古墳副葬品の流れを伝統的に表現したものであろうか。

石室奥、両側壁のめぐらす連続三角文には、石室内の遺骸を囲む幕状のものを想定させる。岩瀬町花園3号墳にみられる垂下した幕状文様の表現は共通した観念かも知れない。

西壁にみられる9個の円文は、伝統的な鏡の副葬を思わせる。熊本県永安寺西・東古墳の例をみて、星宿の表現とも受けとれない訳ではない。三ヶ月状の文様は、九州地方にみられる船の姿が浮かぶ。しかし、虎塚古墳には人物像の表現がない。

こうしてみると、虎塚古墳壁画の内容には、伝統的な古墳副葬品の観念が強くはたらいっている部分と、奥壁中央に描かれた円環文が代表的に表現している「何者か」とが、同居しているように思えてならない。

虎塚古墳の壁画を総合的に観察して、大塚初重先生は「伝統的な葬送観念の表現というよりも、むしろ呪術的な鎮魂儀礼の特色を強くもった除魔的なもの……おそらく儒教的な思想の反映が濃いもの」と想定されている。また、志田諱一先生は「喪屋内部の状態を写しとったもの」と、具体的な状景を説明された。

いずれにしても、死者の葬送儀礼の背後にある思想的、宗教的な部分については、今後、十分な検討の余地がある。しかし、虎塚古墳の内容からは大陸・半島の色彩が読みとれないことだけは事実である。

時を同じくして登場する奈良県高松塚古墳やキトラ古墳とは、全く別世界である。

高句麗古墳壁画とキトラ古墳

大塚初重
(明治大学名誉教授・考古学)

1998年3月6日、奈良県明日香村阿部山に位置している直径14m、高さ2.6mの円形プランを有するキトラ古墳の横口式石槨の壁面に、玄武・青龍・白虎の四神図(朱雀は未確認)と石槨天井に星の運行を示す天文図が発見された。すでに1983年にファイバースコープによる撮影によって、北壁に玄武が描かれていることは確認されていた。今回はNHK映像デザイン部が開発した超小型カメラによって、他の四神図ばかりか内規・赤道・外規という星の運行を示す三個の同心円からなる天文図までが確認され、キトラ古墳の内容が一層注目されることとなった。

1972年3月、明日香の檜前の地域では高松塚古墳の四神と人物群像・星宿などが発見され、壁画の種類や描法・様式などから、古代東アジア世界における壁画関係論が活発に展開された。高松塚古墳の壁画には四神のほかに男女の人物群像が描かれていたが、キトラ古墳には人物像はない。高松塚古墳には星宿図があり、キトラ古墳には四神と天文図が存在した。

壁画古墳で星座を描いた例は朝鮮半島の高句麗に21基も存在し、平安南道大同郡徳花里1号墳では四壁に四神像、天井には北斗七星ほかの星座が描かれている。2号墳の石室天井には19個の星座がある。平壤周辺の竜山里にある真坡里古墳群の中には精密な天文図をもつ4号墳、キトラ古墳同様に北方を向く白虎を描く1号墳など、日本の古墳壁画と関係が濃厚と思われる。平壤市北東の湖南里古墳群、あるいは西方の薬水里古墳など、人物風俗・四神図とともに星宿がみとめられる。

高句麗では4世紀中頃の黄海南道伏獅里古墳壁画の中に星座が描かれ、5～6世紀へと四神図・星宿図・天文図などは発達する天文学の影響をうけて壁面を飾る。鴨緑江を越えた中国吉林省集安の古墳壁画もまた、高句麗の古墳壁画発展の重要な位置を占めている。

高句麗の支配層が信じた陰陽五行の思想にもとづく来世観から、方位を護る守護神としての四神が来世の安寧な生活に必要であったのであろう。7世紀後半に至って百済・高句麗の滅亡に及んで、多数の支配者層の人々の来日があり、おそらく宗教的な来世観などにも影響が及んだことは十分に推測しうるところである。7世紀末から8世紀初頭にかかるキトラ古墳の四神・天文図は、古代東アジアの日朝関係の一断面としてとらえられるであろう。

1. キトラ古墳の問題点
2. 高松塚古墳との関係
3. 高句麗古墳壁画との比較
4. キトラ古墳の性格と被葬者